

問題

次の文章を読み、あとの問に答えよ。ただし、設問の都合により送りがなを省略した箇所がある。

(50点)

1

* 威王 a 引魏 惠王 会田 于 郊 惠王曰、「齐有宝乎。」王曰、「无有。」惠王曰、「寡人国雖

問五

小、猶有径寸之珠、照車前後各十二乘者十枚。」威王曰、「寡人之宝与王異。吾臣有檀

問四・問五

子者。使守南城、楚不三敢為寇。泗上。十二諸侯皆来朝。有二盼子者。使守高唐、

趙人不三敢東。漁於河。有黔夫者。使守徐州、則燕人祭北門、趙人祭西門。有種

5

首者。使備盜賊、道不拾遺。此四臣者、將照千里。豈特十二乘哉。」 惠王有

比喻内容

慙色。

(『十八史略』より)

注

* 威王 Ⅱ 戦国時代の齊の君主。 * 会田 Ⅱ 会つてともに狩猟をした。 * 十二乘 Ⅱ 十二台分の幅。 * 泗上 Ⅱ 泗水

(齊国南方を流れる河)のほとり。 * 祭 Ⅱ 敵(ここでは齊のこと)に攻め込まれないように祈願を行った。

問一 傍線 a・b の語句の読みを、送りがなの部分も含めてすべてひらがなで記せ。

(6点)

【チェック】 問一・問二・問三 重要語句や句形を押さえる

問五 対比関係を押さえる 問四 比喻表現の意味する内容を押さえる

問一 a 文脈から多義語の意味を推測する

問二 傍線 1・4 をすべてひらがな（現代仮名遣い）で書き下し文にせよ。

(14点)

問三 傍線 2 を口語訳せよ。

(8点)

問四 傍線 3 について、次の (i) (ii) に答えよ。

(i) 「此の四臣」とは誰のことか、文中から抜き出して記せ。

(4点)

(ii) (i) の人々が「将に千里を照さんとす」とはどういうことを言おうとしているのか、具体的に説明せよ。

(8点)

問五 傍線 5 とあるが、恵王はなぜ「慙づる色」になったのか、六十字以内で説明せよ。

(10点)

問二
句形や主語・動詞・
目的語といった文構
造に着目し、正しく
書き下す

問五
頻出パターンを意識
して解く

出典

『十八史略』巻一 春秋戦国

『十八史略』は、宋末元初の曾先之がまとめた歴史書である。

書名は、『史記』以降の中国歴代王朝の十八の史書の内容を簡略に記した書、というほどの意味で、古来の王朝の興亡や戦乱、王侯将相の言動や事跡を、印象的なエピソードを中心にまとめている。

日本には室町時代中期に伝来し、江戸時代には教科書にも用いられたため、この書から生まれた故事成語や格言は非常に多い。

現代の受験生にとっても、漢文の語彙・文法や、漢文的なものを見

方や考え方を理解するのに役立つ便利な書であり、教科書や参考書への利用も多く、入試での出題も例年かなりの数となる。

解答

問一 a と b おのおの

問二 1 かじんのくにはしようなりといえども

4 あにただにじゅうにじょうのみならんや(と)

問三 無理に泗水のほとりに攻め入ろうとはしない

問四 (i) 檀子、盼子、黔夫、種首

(ii) 国の防衛や治安において、千里を照らす珠にも等しいめざましい働きをするであろう、ということ。

問五 国の維持と発展のために働く家臣を宝とする威王の言を聞き、自分がただ美しいだけの珠を宝として自慢した愚かさ気づいたから。
(60字)

解説

齊は中国の東方に位置する大国で、東は海に面し、北は燕、西は趙・魏、南は楚・越などと接する。戦国時代には、太公望の建国以来の姜・姓呂氏に代わり、嬀姓田氏が君主となった。威王はその三代目。即位から九年間の「鳴かず飛ばず」の雌伏期間を経て、独創的な政治で齊の国力を高めた名君主。学問を奨励し、首都臨淄は学府として栄え、そこに集った人材は「稷下の学士」と称せられた。

魏は戦国時代の始まりに晋から分かれて立った三国の一つで、強勢を誇ったが、東は齊、北は趙、西は秦、南は楚・韓などに囲まれて争いが絶えず、恵王の時代には国力にかけりが見えていた。

今回の文章の概要

問題文は、齊の威王と魏の恵王とが、自国の宝に関して行った問答である。威王が自らの人材登用について語る場面なので、「1 主人公が自分のために行動するパターン」に準じて考える。

A

【紹介】

齊の威王と魏の恵王とが一緒に狩猟した際に、自国の宝についての話題となる。(ℓ1)

B

【相手の発言】 恵王が、自国には素晴らしい珠(宝石)があると自慢する。(ℓ1・2)

C

【主人公の反論】 威王は、自国には宝石のようなものはないが、四人の有能な臣下がいると述べる。(ℓ2〜5)

D

【相手の反省】 恵王は恥じ入った。(ℓ5・6) (↓問五)

相手の恵王の発言が議論の発端なので、必修テーマで紹介した【典型的な展開】とはB C Dの展開が異なるが、両者のやりとりが基本であることに変わりはない。

恵王が宝とする「径寸の珠、車の前後各十二乗を照す者十枚」とは、〈直径一寸(約三センチ)の宝玉で、馬四頭立ての戦車の前後十二台、つまり戦車二十四台を並べて置いた距離を輝いて照らすようなものが十個〉ということである。

このような即物的な宝物を誇った恵王に対して、威王は「わが国の宝は、四人の家臣である」と答え、これを聞いた恵王が恥ずかしく思った、という話である。

古来中国において、賢臣を尊ぶのは、君主の最も大切な資質と目ざれていたことを覚えておこう。

次に、必修テーマの「読解のポイント」に沿って、本文の核となるCの部分の構造をもう少し詳しく見よう。

1

【問題提起】

自分の持っている宝は、珠のようなものではない(＝国の宝とは、そのようなものではない)ではないか、という問題提起。

2 【現状確認】

（珠はないものの）わが国には四人の臣下がおり、彼らは国の維持・発展にとっても貢献している。

3 【結論】

この四人の臣下の輝きは、珠とは比較にならない（この四人は、珠の貴重さをはるかに上回る）。

（↓問四（ii））

このように部分ごとに構造を把握すると、内容を理解しやすいことがわかるだろう。

重要表現

※太字の意味が、文中で使われている意味です。

㊦ 1 有^{あり} 「動詞」〈持つ・備える・ある・存在する〉

↓ 「主語」有^二「目的語」の形で、直後に目的語をとるが、訓読では「有」を「あり」と読むため、目的語が書き下し文の實質上の主語になる。したがって、「齊有^レ宝」は〈齊は宝をもつ〉ではなく、〈齊に宝がある〉となる。

【対義語】無

㊦ 3 来朝 〈他国の使者が朝廷に来て礼物を捧げること〉

☑ 文脈から多義語の意味が推測できたか

☑ 重要語句を押さえられたか

問一 a 「与」は文中で置かれる位置によって、読みも品詞もさまざまに変わる重要語。動詞として、

① 「くミス」と読み、〈味方になる・仲間になる・賛成する〉

② 「ともニス」と読み、〈一緒に行く〉

③ 「あたフ」と読み、〈授ける〉

④ 「あづカル」と読み、〈関与する〉

などと読み分けるほか、

⑤ 「与^二体言」の形で、「〜と」と読み、〈〜と一緒に〉という意を表す前置詞の用法（後の体言が省略された場合は、単独で「ともニ」と読む）

⑥ 「A^ト与^二B」^とという形で、「AトBと」と読み、並列の関係を表す前置詞の用法

⑦ 「与^ニA[、]寧^ニB」の形で、「AよりハむしろB」と読み、〈AよりはBのほうがよい〉という比較選択の句形を作る用法（「寧^ニB」は「不^レ如^ニB」などにも置き換えられる）

⑧ 文末に置かれて「か」「や」「かな」などと読み、疑問・反語・詠嘆などの意を表す終助詞の用法

などがある。特に⑤〜⑧は入試で問われやすい用法なので、それぞれの場合の「与」が置かれる位置をしっかりと覚えておきたい。

ここでは「与」が「魏恵王」という体言の前に置かれて、「威王」が「魏恵王」と一緒に「会田」した」という文脈を作っているのので、⑤の前置詞の用法で「と」と読む。

b 「各」は「おのおの」と読み、〈個々・それぞれ〉という意味を表す。

訓読で、このように同じ音を繰り返して読む語（「暈語」）となる漢字には、他に、

- 「愈」いよいよ（＝いっそう） ※愈々・逾
- 「交」こもごも（＝かわるがわる）
- 「数」しばしば（＝たびたび） ※数々・亟・屢
- 「偶」たまたま（＝思いがけなく） ※偶々・遇・適
- 「益」ますます（＝いよいよ） ※益々・倍

などがあり、送りがなとして、それぞれの二回目の読みを「上」の音を重ねて二度読むことを表す記号で、「踊り字・揺すり点・二の字点」などと呼ばれる）で示すことがある（例「各々」）。

☑ 重要語句や句形をpushさされたか
 ☑ 句形や主語・動詞・目的語といった文構造に着目し、正しく書き下せたか

問二 1 「寡人」は「かじん」と読み「寡」は「少ない・弱い」という意の形容詞、君主が自分自身を「徳が少ない人」と謙遜して呼ぶ、特別な一人称代名詞。ここは恵王が自分自身を指している。
 「雖」は「いへども」と読む、逆接の条件を示す接続詞で、「而」や「尚（＝猶）」などで始まる文節を後に伴い、譲歩の構文を作る。
 雖——、（而）……
 〈訓読〉（〜ハ）——トいへども、……
 〈意味〉①（〜ハ）たとえ——としても〔逆接の仮定条件〕、……

②（〜ハ）確かに——であるが〔逆接の確定条件〕、……
 ※主語「〜」は、①の意では「雖」の後に、②の意では「雖」の前に置かれることが多い。

ここでは「猶」以下の後半節と呼応して、〈私の国は確かに小さいが〉と、逆接の確定条件を表している。
 「小」は「しようナリ」と読めばよい。

以上より全体を現代仮名遣いで書き下すと、「かじん（ノ）くに（ハ）しようナリトいえども」となる。

4 「豈」は「あに」と読み、疑問・反語の終助詞「哉」と呼応して、反語の句形を作る副詞。

豈……哉 ※哉＝乎・也・耶・邪・歟
 〈訓読〉あに……ンヤ
 〈意味〉どうして……か（いや、……ない）〔反語〕

「特」は、「たダ（……ノミ）」と読む限定の副詞。
 特…… ※特＝唯・惟・但・徒・只・直／独（ひとり）
 〈訓読〉たダ（……ノミ）

〈意味〉ただ……だけだ……にすぎない〔限定〕

右の二つが組み合わさったものが、「豈特……哉」という形である。

豈特……哉
 〈訓読〉あにたダニ……ノミナランヤ
 〈意味〉どうしてただ……だけであろうか、いや、……だけでは

ない〔限定＋反語〕

この形では、「豈」と「哉」に挟まれた部分（「限定＋……」）の内容が結局否定されるという点がポイント（反語⇨否定なので）。ここでは「特十二乗」が結局否定されて、〈どうしてただ十二乗（を照らす）だけだろうか、いや、それだけではない〉となる。

以上を合わせると、「あ二たダニじゅうにじょうノミナランや」という書き下し文ができる。

☑ 重要語句や句形を押さえられたか

問三 訓点に従って傍線部を書き下し文にすると、「敢へて寇を泗上に為さず」となる。

「寇」は「元寇」という言葉からもわかるように、〈外敵が攻め寄せること〉を意味する。ここでは「あだ」と訓読しており、「寇を為す」で〈攻撃をする・攻め入る〉となる。

「泗上」は「注」にある通り「泗水のほとり」と訳せばよい。

「不三敢……」は「あへて……ず」と読み、〈無理に……ない〉という否定の意を表す句形である。否定詞「不」が〈思いきって……する〉という強い意志を示す「敢……」を否定している。

不三（無三）敢…… ※不⇨弗（無⇨莫・勿・毋）

〈訓読〉あへて……ず（無三）

〈意味〉無理に……ない

以上から全体で、〈無理に泗水のほとりに攻め入ろうとはしない〉

などと訳せる。

なお、この「不敢……」は、否定詞と「敢」の語順が逆になる「敢不……」の句形との区別が重要である。

敢不三（無三）敢……

〈訓読〉あへて……ぞラン（ヤ）

〈意味〉どうして……ないだろうか、きつとする

〔反語⇨強い肯定〕

語順が逆になると、意味が正反対になる。それぞれの訓読と意味をここでしっかりと覚えておきたい。

また、否定詞と「敢」を使う句形では、「敢」が二つの否定詞に挟まれる次の用法も重要である。三つ一緒に覚えておこう。

不三敢不三（無三）敢……

〈訓読〉あへて……ずンバアラズ

〈意味〉どうしても……ないわけにはいかない

〔二重否定⇨強い肯定〕

☑ 比喩表現の意味する内容を押さえられたか

問四 訓点に従って傍線部を書き下し文にすると、「此の四臣は、将に千里を照さんとす」となる。

問二の4で見た「豈特……哉」という限定の否定は、その後に「（亦）——」という形を伴って、〈……だけではなく、——である〉という累加の表現を作るが、その後半部「——」が倒置されて前に出てきた

ものである。

豈特……

ノミナランヤ

哉、(亦)……

——

〔訓読〕

あ二たダニ……ノミナランヤ、(また) ——

〔意味〕 どうしてただ……だけであろうか、いや、……だけでは

なく、——で(も)ある(累加)

(i) 「此の四臣」とは、その前の威王の発言に出てきた、「檀子」「盼子」「黔夫」「種首」という四人の斉国の家臣である。彼らは、斉国を他国の攻撃から守るだけではなく、他国からの来朝を促し、治安を維持し、国力の維持・発展に貢献しているのである。

(ii) 魏の恵王は、自国の宝として「径寸の珠……十枚」を挙げた。その言葉に対して威王は、檀子、盼子、黔夫、種首の四人の優れた家臣の働きをそれぞれ述べた上で、この四人が「将に千里を照さんとす」と言ったのである。

つまり〈千里の距離を照らすであろう〉とは、家臣(の働き)を「珠」にたとえた比喻表現で、この四人の家臣が、〈外交や内政の分野において、千里の先まで輝いて照らす珠のように、斉国の隅々まで明るく照らし出すようなめざましい働きをしよう〉という趣旨の発言である。

設問には「具体的に」とあるが、四人の功績を列記するのではあまりに煩雑になりすぎるので、〈国の防衛と治安〉〈外交と内政〉などとまとめるのがよい。

テーマ問題

頻出パターンを意識して解けたか

対比関係が押さえられたか

問五 「慙」は〈慙愧の念〉などと使われるように、〈恥じる〉の意。「慙色」は〈恥じ入った顔つき・きまり悪く思う様子〉という意味である。なぜ恵王はこのような顔つきになったのか。

「径寸の珠……十枚」を誇る恵王に対し、威王は〈自分の国にはそういう種類の宝物はないが、しかし自分の四人の家臣の働きは、ただ車の前後十二乗ばかりを照らすようなものではない〉と、**国の維持や発展の役に立つ、優れた家臣を斉国の宝として誇った。**

昔から「政を為すは人に在り」(孔子の言葉とされる『中庸』にある格言)と言うように、優れた人材こそが国の政治の要であるが、恵王はそのことを忘れていた。威王の答から恵王は、**自分が珠のような美しいだけで国のためには役立たないものを宝として自慢したこと、愚かしさに気づき、恥ずかしくなったのである。**

威王は、明確な教示や説諭をしているわけではないが、その言葉は確実に恵王の心に響いている。

解答の際は、威王と恵王との対比を意識してまとめよう。

訓読

威王^{きわう}魏^ぎの恵王^{けいわう}aと郊^{かう}に会^{くわい}田^{でん}す。恵王^{けいわう}曰^いはく、「齊^{せい}に宝^{たから}有^あるか」と。王^{わう}曰^いはく、「有^あること無^なし」と。恵王^{けいわう}曰^いはく、「寡^{わうじん}人の国^{くに}小^{せう}なり」と。雖^なも、猶^{なほ}径^{けい}寸^{すん}の珠^{たま}、車^{くるま}の前後^{ぜんご}b各^{おの}十二^{じふに}乗^{じやう}を照^{てう}らす者^{もの}十^{じゆ}枚^{まい}有^あり」と。威王^{きわう}曰^いはく、「寡^{わうじん}人の宝^{たから}は王^{わう}と異^{こと}なり。吾^{わが}が臣^{しん}に檀^{たん}子^しといふ者^{もの}有^あり。南^{なん}城^{じやう}を守^{まも}らしむれば、楚^そ2敢^あへて寇^{あだ}を泗^{しやう}上^{じやう}に為^なさず。十二^{じふに}諸^{しよ}侯^{こう}皆^{みな}来^ら朝^{ちやう}す。勝^{べん}子^しといふ者^{もの}有^あり。高^{かう}唐^{たう}を守^{まも}らしむれば、趙^{てう}人^{ひと}敢^あへて東^{とう}のかた河^かに漁^{ぎよ}せず。黔^{きん}夫^ぶといふ者^{もの}有^あり。徐^{じゆ}州^{しゆう}を守^{まも}らしむれば、則^{すなは}ち燕^{えん}人^{ひと}北^{ほく}門^{もん}に祭^{まつ}り、趙^{てう}人^{ひと}西^{せい}門^{もん}に祭^{まつ}る。種^{しゆ}首^{しゆ}といふ者^{もの}有^あり。盜^{たう}賊^{そく}に備^{そな}へしむれば、道^{みち}に遺^{おち}ちたるを拾^{ひろ}はず。3此^この四^し臣^{しん}は、将^{まさ}に千^{せん}里^りを照^{てう}らさんとす。4豈^あに特^ただに十二^{じふに}乗^{じやう}のみならんや」と。5恵王^{けいわう}慙^はづる色^{いろ}有^あり。

全訳

威王が、魏の恵王aと（一緒に）城外の地で会合して狩りをした。（そのとき）恵王が（威王に）、「斉国には何か宝がありますか」と尋ねた。威王は「何もありません」と答えた。（すると）恵王は、「1私の国は小さな国ではありますが、それでも直径一寸の宝玉で、馬四頭立ての戦車の前後をbそれぞれ十二台分の距離を輝いて照らすようなものが十個あります」と言った。（そこで）威王は答えた。「私の宝は王とは異なっております。私の家臣に檀子という者があります。（この者に）南城の地を守らせたところ、（斉の南の隣国の）楚は（これを恐れて）2無理に（国境にあたる）泗水のほとりに攻め入ろうとはいたしません。（また）十二諸侯が皆我が国に礼物を捧げに参るよう

になりました。勝子という者があります。（この者に）高唐を守らせたところ、（斉の西の隣国の）趙の人々は、無理に東の国境にあたる黄河で魚を獲ろうとしなくなりました。黔夫という者があります。（この者に）徐州を守らせたところ、（斉の北の隣国の）燕の人々は（国境にあたる、斉の）北門で（わが国に攻め込まれないように）祈願を行い、（また斉の西の隣国の）趙の人々は、（国境にあたる、斉の）西門で祈願を行いました。種首という者があります。（この者を）盗賊の取り締まりにあたらせたところ、（斉国の人々は）道に落ちていたものでも勝手に拾わなくなりました。3この四人の家臣は、千里の遠くまでを照らし出すでしょう。4どうしてただ十二乗を照らすだけでしようか（いや、それだけではありません）」と。5恵王は（それを聞いて）恥じ入った顔つきとなった。

まとめ

- ・ 文脈から多義語の意味を推測する
- ・ 重要語句や句形を押さえる
- ・ 句形や主語・動詞・目的語といった文構造に着目し、正しく書き下す
- ・ 比喩表現の意味する内容を押さえる
- ・ 頻出パターンを意識して解く
- ・ 対比関係を押さえる